

東京鶴城会便り

発行責任者
田中幸資

ボランティア活動が健康の秘訣！

昭三十一年卒の櫻井正男さんは、お住まいのある都内北区の王寿会（老人会）の会長であり、同会の様々なイベントを通じて、地域の住民・団体との触れ合いを大事にされています。中でも、年間四回の公園内花壇の花植え（写真）は、一大イベントで重労働でもありますが、持ち前のボランティア精神でご尽力され、地元住人に憩いのひと時をご提供されています。王寿会は、他にも交通安全旬間、防災訓練等の社会活動に積極的に取り組まれています。

また、櫻井さんは、実に三十七年間に及ぶ少年野球の指導者としてのボランティア活動もあります。その間、二度の甲子園出場を果たした教え子もいて、指導者冥利に尽きる嬉しい事もあったと聞いています。ご本人も宇土高校時代は、野球部のキャプテンとして県新人戦準優勝に貢献されており、いつの日か母校の甲子園出場を心待ちにされているようです。「紅蓮火を噴く・・・」の校歌が流れることを期待したいです。

いつも素敵な笑顔で周りの人達を和ませていらつしやる櫻井さんですが、来年には金婚式を迎えられます。素敵な奥様といつまでも仲良くお過ごしくださいと願っています（編集者）



「宇土のちいさな旅」

昨年12月中旬、母の17回忌法要があり、久しぶりに帰省しました。お土産に馬刺しを買おうと、近所の「桜屋」さんに立ち寄った時、宇土市観光物産協会発行の「宇土のちいさな旅」という情報誌を手に入れました。耳慣れた場所なのに、行った事のない所等、情報満載でした。日本の渚百選・夕日百選に選ばれた「御興来海岸」干潮と日の入りが重なる時、神秘的な光景が現れるそうです。一度は観てみたいですね。

次回の帰省時には是非とも57号線海岸沿いをドライブしたいと思います。宇土アリーナでクルージング体験もいいですね。イルカに遭えるかも...。楽しみです。

宇土市内には、コミュニティバス「行長しゃん号」が走っていました。皆さん、帰省の際は、「行長しゃん号」に乗って、宇土の観光名所を散策してみてくださいは如何でしょうか。

吉田ほのか（昭52年卒）



【ある夏の日の事】

私は、昨年8月23日から25日まで帰省した。高校時代と違い、私の実家は現在熊本にあるので、かつて住んでいた宇土市境目町の県営住宅には、10年以上行っていなかった。そこで、実家に行く前に宇土に寄ってみて懐かしみたいと思った。8月23日の暑い午後、私は熊本駅から宇土駅に電車に向かって。途中で駅が一つ増えているのでびっくりした。乗り降りする人がそんなにいるのかなと疑問に思った。赤字がますます増えるんじゃないかと心配になった。

宇土駅に着いて更に驚いた。駅舎が新しくなってモダンになっていたのである。駅前の様子も変わっていた。残っている店もあったが、昔の面影はなくなっていた。しかし、大きな道路が駅から伸びていて、少しは発展しているのかなと思った。

普通は駅からタクシーで家に向かうのだが、たまには歩いて行ってみようと思い30度以上の気温の中、ミネラルウォーターを片手に歩き出した。最初、タクシーが通っていたルートで歩き始めたのだが、新しい道が増えたせいか途中で道に迷ってしまった。そこで、駅から伸びている大きな道路から国道に出て家に向かうことにした。国道沿いにも新しい建物が出来ていて、やはり発展していることが窺

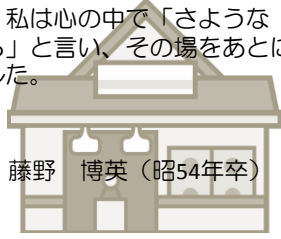
われた。

暫く歩いていると、さすがに30度以上の気温のせいか、汗が噴き出してきた。少し後悔したのだが、「日頃、運動不足だからいいか」と自分を無理矢理納得させた。そのうち、国道から県営住宅（団地）に向かう道が見えてきた。あと少しだ。しばらくして、小学校の時よく遊んだグラウンドが見えてきた。急に懐かしさがこみ上げてきた。暗くなるまで野球などして遊んで楽しい時間を過ごしていたのだ。それから電話ボックスが見えてきた。タクシーで降りる時はいつもここを指定していた。「さあ、ついに来たぞ。」私の胸はドキドキしていた。

そこで私の時間は止まってしまった。私は愕然とした。そこにあるはずの「家」が存在しないのだ。何かの間違いじゃないかともう一度よく見ると、県有地と書いてある立札があった。他の棟はあるのに、なぜ自分の住んでいた棟だけがないのか。私は訳がわからなかった。年月というのはひどい仕打ちをしたのだ。

私は心の中で「さようなら」と言い、その場をあとにした。

藤野 博英（昭54年卒）



“楽しい遊び”を見つけました！！

みなさん、日々、退屈せずに暮らしていらっしゃいますか？ 私は、この頃、楽しい遊びを見つけましたので紹介します。

その“楽しい遊び”とは、毎月二回、公園や奥多摩、相模湖などへスケッチに出かける水彩画教室です。参加者は、大半が定年を迎えて時間に余裕たっぷりの男女十数名で、講師のK先生の“上手に描こうと考えず、楽しく描けば良い！”の教え通り、存分に楽しんでいきます。

昨年12月は、それぞれスケッチした絵を木版画に

して年賀状（右下）を作りました。私は、多摩川から見える富士山を描いてみました。出来上がった年賀状をみんなで自画自賛し、笑顔で新年を迎えました。水彩画にご興味のある方は、是非、始めてみませんか。

橋 美穂子（昭39年卒）



昭和40年卒の境屋です。「お城訪問 国宝シリーズ」第3弾、今回は愛知県の 国宝**犬山城**に行ってきました。

犬山城は、木曽川の南岸にそそりたち、470年ほど前に織田信康（信長の叔父）によって築かれたとの事で、現存する天守閣では最古と言われています。ご存知の方もあると思いますが、城主は江戸時代初期にかけてめまぐるしく替り、天正12年（1584）小牧・長久手合戦の際には羽柴秀吉がこの城に陣取り、小牧山に陣をしいた徳川家康と戦った舞台としても知られています。江戸時代には、成瀬正成が城主となってからは成瀬氏が代々受け継いで幕末を迎えました。明治維新に犬山城は廃城となり、天守を除いて櫓や門の大部分は取り壊されたとの事です。昭和34年の（1959年）の伊勢湾台風などで天守の破損が激しくなったため、全面的に解体修理工事を行っています。天守は昭和10年（1935年）に国宝に指定され、昭和27年に規則改正にともない、再度、国宝に再指定されたそうです。現在は、犬山城白帝文庫の所有で犬山市の管理下にあります。

この犬山城を訪問するにあたって、いつものお城訪問は、愛車でドライブついでに出かけていたのですが、12月2日の笹子トンネル崩落事故があったばかりで、さすがに今回は新幹線で名古屋方面への一人旅となりました。久しぶりの東海道新幹線でのひとり旅で、国宝の犬山城を訪ねる旅に、テンションが上がっていきました。

12月13日の朝9時頃、新幹線から新幹線で出発し天候に恵まれて、静岡辺りでは富士山が旅を盛り上げてくれました。旅の楽しさを感じるために、あえて各駅停車の「こだま」で名古屋まで行きましたので、名古屋に着いたのは午前11時半頃、名古屋から名鉄犬山線に乗り換えて、特急だと25分ほどで犬山駅到着！駅前の案内に沿って古い町並みの本町通りを通り、丸の内を過ぎたあたりから、目的の国宝犬山城が望めました。

天守閣の構造は3重ですが、建物内部は地下2階（石垣の中）と4階の構造になっていて、急勾配の木造の階段（ほとんど梯子状態）は、これまでの松本城、

彦根城と同じ形式でした。石垣の「野面積み」が印象に残ったのと、天守閣最上階からの眺めは木曽川を望んで素晴らしく、殿の気分にはさせてくれました。夏から秋にかけては、有名な「木曽川うかい」が夜の犬山城を美しく引き立ててくれる趣のある風景景観です。今度は夏場に再会しようと思心決めて、犬山城から小牧山（小牧城）に向かいました。

昼食は、犬山駅近くの寿司屋でランチ寿司（¥900）吸い物、デザート付に惹かれて店に入ると客は私一人で「失敗したかな〜！」と思ったら案の定、握り寿司のシャリはベチャベチャ、ネタはコンビニの寿司弁当クラス、デザートはブッチンプリンでした。残念!!!!

今回のお城訪問は国宝犬山城以外に、小牧城、名古屋城、清洲城と4天守を訪問していますので、順次紹介していきます。今回は一泊二日の一人旅！夜の名古屋の栄町界隈で楽しく寂しく一人飲み歩き、やっぱり気心知れた宇土高校同窓の友人と飲み歩いた方が、3倍にも10倍にも楽しめたな〜と、反省しました。



「男は三年に三口」たい

築百年以上の実家にある真っ黒に塗られた四角の大黒柱は、七歳の私が抱きついてても手が届かなかった。

“おもて”と呼ぶ十畳間には、どしんと重い応接台だけが置かれていた。襖を隔てた奥の座敷には、床の間と仏壇があった。その隣は両親の寝室で、へんや母の嫁入り道具の長持ちや筆筥があった。大黒柱の左手が茶の間、家族七人が過ごす場。窮屈でもここに集まっていた。テレビの真正面に父と祖母、台所側に母が座り、あとの隙間を子供達が埋めた。

喋りっ放しの末っ子の私、兄が絡んで来る。父が一言面白く茶化す、どっと笑いが溢れる。心に残る風景。通り過ぎた扉を開ければ、今もいつでも茶の間に座れる。

いつも鍵なんか掛けない重い引き戸の玄関を入ると土間。「おったかなー」と声がした時には、上がり框に片足をかける客は、大人しい叔父だった。黙ってテレビを見る。頃合いをみて、おもてに席を移す父と叔父、いつもの間合い。「どきやんもこきやんもなかない。かかあがなんか言うたら、応接台ばひっくり返してみい」。父と叔父にしては過激な話に、私の耳が大き

くなった。後日、「おるがな、晩飯の台ばひっくり返したもん。かかあが青うならいたたい、そっから威張られんごつなっばい」湯呑茶碗で焼酎を酌み交わして腹を抱えて笑う二人。叔父は養子だった。仰向けになり腹の上に指を組み、両の親指をくるくる回すのが、父が考え事をしている癖だった。「看護学校の寮はどきやんかい」、「楽しかよ」。話したがっているのが分かっているのに、それだけで黙る十九歳の私。

「熊本の男は三年に三口」（注）で言うたい。べらべら喋るもんじゃなかない」とは祖母の言葉。無口な父は、目と間合いで相手に語りかけていたようだった。五十五年経った今、あの頃の家族はすぐ上の兄と二人だけになってしまった。誰も住まない家の大黒柱は頑張っているが、

（注）小泉八雲が九州魂を語っている一節が、言い得て妙である。—九州かたぎとは、非常の場合に際しても、うわべは顔のすじひとつ動かさずに泰然自若としている。ところが、この自制力の下には、猛烈な自力意識がかくされているのであって、どうかすると—中略—。東洋流の豪傑肌がかれらには多分にある。—小泉八雲『東の國から』

田中 久美子（昭43年卒）

【新たな世界に目覚めました！？】

先輩や同輩の方々には、身に覚えのある事かも知れませんが、入社以来、仕事一筋で多忙を極めていた私でしたが、第一線を退いて何となく、精神的にも時間的にも余裕らしきものが出来ました。現役時代は、テニスの真似ごとをややる程度で、多くはラグビー観戦、競馬観戦、野球観戦などスポーツ観戦やマージャンが殆どでしたが、ここにきて芸術？に目覚めました。

最初の出会いは、知人の関係で聴きに行った女子弦楽アンサンブルの弦楽4重奏でした。付き合いで聴きに行ったのですが、その音色の素晴らしさ、自分が馴染んでいた世俗的な音楽とは、異なる音色の美しさに聴き入りました。その時自分には、“芸術・芸能”との接点がありませんでした。

絵画を見るのも、例えば、ルーブル美術館に行った事はあるのですが、あくまでもツアーの一環であり、決して積極的に自ら観に行った訳ではありませんでした。

そんな“芸術音痴”の自分に、同期の松岡さんから演劇鑑賞の誘いがありました。演劇に関しても、やや不安はあったのですが、思い切って誘いに乗って観に行きました。

その演劇集団は、松岡さんの息子さんが所属しているので、同期の何名かで観に行ったのですが、その劇団に宇土高の卒業生がいることが判り、余計に親しみを感じるようになり、それから5〜6回は、観に行き、その度に感動を貰っています。もちろん、松岡さんの息子さんや宇土高の後輩を交えての食事会・飲み会は欠かせません。

後輩と話をしている時に、彼の眼が輝いているのを見て大いに頼もしく感じました。これからも観劇することで、ささやかな応援が出来ればと思っています。彼以外にも、宇土高の同窓生で、オペラの世界で活躍したり、銀座で絵画の個展を開いたり、芸術・芸能の面で活躍している方々がいるということを聞いています。

これからは、彼らの活躍の舞台を可能な限り聴きに行き、観に行くと大いに楽しみたいと思っています。そして、そうすることが自分のためでもあり、併せて同窓生の僅かな応援になれば幸いです。

萩原 秀文
（昭42年卒）



宇土の歴史をひも解く

どうも50歳を過ぎたあたりから、生まれ育った宇土の歴史を知りたいとの思いが強くなってきた。どの時代と問われると、何故か江戸、室町、鎌倉、平安、奈良時代を飛び越えて、弥生時代から古墳時代あたりの宇土の歴史に興味をおぼえてしまった。

ところで、宇土半島基部には数多くの古墳が点在している。熊本県全体を見渡しても、その密度は群を抜いている。それは、宇土地方の地政学的な条件に起因しているのは、素人目にもわかるが、当時の隣接した国々との関係においても、その優位性を持ち得た何かがあったのだと思うのは、やはり身びいき過ぎるのかもしれない。渡辺京二著「熊本県人」の一節に、「奈良朝以前の古代の肥後には、火の君、阿蘇君、芦北君などの豪族がいた。火の君は、宇土・八代地方を本拠とした肥後最大の豪族で後に肥の君といわれ。」とある。当時の王朝の所在地がどこであったかという、重要な問題を抜きにしては語れないと思うが、いずれにしても、宇土には驚くような歴史が確かに存在したのだろう。

数年前に帰省した折、是非、行ってみたいと心に決めた所があった。それは、馬門（まかど）地区である。その地名は「宇土の今昔百ものがたり」（宇土市発行）を読んで初めて知った。少し長くなるが引用したい。「1500年前の六世紀前半頃、ヤマト政権に君臨していた継体天皇のひつぎには、宇土市網津町馬門産のピンク色をした馬門石が用いられていた。馬門石は九万年前の阿蘇山の噴火によってできたピンク色の特徴的な凝灰石であり、五世紀から六世紀前半にかけて瀬戸内海沿岸のいくつかの石棺に用いられた。」



その日は朝から小雨まじりの天気だったが、とりあえず車で馬門（まかど）地区に向かうことにした。網津駅の手前を左に折れ、網津川に沿ってしばらく走ると、コンクリートの橋が前方に見えてきた。右手に目をやると低い山なみに雨雲が垂れ込めている。

土地勘がなくてちょっとためらったけれど、右折して橋を渡ると、すぐ「馬門川」と書かれた掲示板が目に入ってきた。確かに川幅が1メートルにも満たない川が坂道に沿って流れている。

道の両脇には民家が点在しているが、どこまで車を進めたら馬門石の採石場に行けるのか見当がつかない。だんだん道幅も狭くなってきたので、空き地に車を停めて歩くことにした。

ゆるく傾斜した道を数分歩くと、そこから見えたのは数本の杉木立、そして、その向こうに赤みを帯びた大小様々な石が横たわっている採石場が現れてきた。人は誰もいない。今日は雨だからなのか、それともずっと前から廃れていたのであろうか。ところで、前述した「宇土の今昔百ものがたり」の引用部分とは全く異なった見解を披露している本がある。それは、「倭の五王と磐井の乱」（佃 収著）である。その一節を引く。「阿蘇ピンク石製石棺が近畿地方へ運ばれる時期はまさに倭王武の時代である。倭王武は筑紫の君であり、筑紫の君は九州を支配している。筑紫の君（倭王武）が支配している地域（肥後）から、大和政権が特注の石棺を造らせて取り寄せることは不可能であろう。阿蘇ピンク石棺に埋葬されている人々は中肥後（熊本県宇土市近辺）の出身者であろう。継体天皇も阿蘇ピンク石製石棺に埋葬されている。継体天皇も熊本県宇土市近辺の出自ではないだろうか。」

ここまで大胆に言い切った人は、他にいないのではないかな。なんと、継体天皇、あるいはその親族の本貫が宇土市辺りではと見当を付けているのだ。日本書紀によると、越の国から大和に招いた大王となっているが、継体天皇自身についても諸説があり、正直言ってよくわからない（諸説などと大見得を切ったけれど、数冊の本を読んだ程度です）。

継体天皇の問題はともかく、その時代に宇土が果たした役割は、今想像する以上に大きかったのではないだろうか。例えば、ピンク石の石棺を摂津まで曳航したその航海技術は、驚嘆に値する。それは、宇土が古代において、輝きを放った一時期であったのかもしれない。目の前に、馬門地区の採石場で拾ってきたピンク石の石塊がある。残念ながら、少し退色しているけれど、これを眺めながら、宇土の往時を偲ぶのも一興かもしれない。

小山英一（昭50年卒）



私のグルメレポート！ - Vol.5 - 東京で味わえるふるさとの味

「そま莉」

今や、熊本を代表する食べ物と言えば「馬刺し」というのは定着した感がありますね。でも、馬のしゃぶしゃぶって食した経験はあるでしょうか？

目黒駅からすぐの「そま莉」は、さくらしゃぶしゃぶが有名なお店です。こじんまりとしたお店ですが、清潔感があって家庭的で暖かみのあるお店です。

若くて美人の店主がふるまってくれるのは、熊本直送の馬刺し、天草で釣れた鯖の一夜干し、手作りの辛子レンコン、だご汁、たかなご飯とどれもこれも懐かしい味。つつい、お酒（もちろん球磨焼酎、熊本の日本酒）もすすみます。やっぱり一押しは「さくらしゃぶしゃぶ」。これは要予約ですのでご注意ください。

お皿いっぱい美しく盛りつけられた、目にも鮮やかな馬肉は生でも食べられる鮮度で、これを贅沢な一番出汁にさっとぐらせ、たっぷりの白ネギといただく、口のちいさなうちに広がる、とろけるような甘み。もうたまりません。とまりません。お肉を堪能した後は、お楽しみの雑炊で身も心も温まって下さい。

そま莉 品川区上大崎2-4-19 東和ビル2F
03-3493-2051

「ぶりきや」

六本木ミッドタウンから外苑東通りをはさんだ、向かいのビル地下にある居酒屋です。看板に「男の手料理」とあるだけあって、飾りがなくボリュームいっぱいの、それでいて母の手料理を思い出しそう、味わいのあるお料理がいただけます。

ビルの地下に下りて行くと、ちょっと薄暗い感じですが、思い切ってその重い扉を押してみましょ。そこには、美味しい料理とお酒と居心地のいい空間が待っています。

まるごと一匹焼いた焼魚定食、コロッケ定食が人気のランチタイムには、まだ行っていないので、がつり食べたい時に行ってみたいと思っています。

六本木には、おしゃれなお店ばかりで物足りないな...と思ったら、仕事終わりに仲間と飲みながらくつろぎたいな...と思ったら、行ってみてはいかがでしょうか。

ぶりきや 港区六本木7-12-2 森野ビルB1F
03-3405-6261

塚原 直美（昭52年卒）

お知らせとお願い

『東京鶴城会便り』および広告の原稿を随時募集します。

『東京鶴城会便り』の原稿を随時募集しています。内容は同期会、あの時あの頃、あの人この人、旅行記、家族、ふるさと自慢、随筆、趣味、夢など、なんでも結構です。お礼はできませんが、お気軽にメール、手紙などで下記までお送りください。

また、資金不足のため、1件5千円で名刺広告をお願いいたします。会員の皆様のご協力をお願いいたします。

当会のHPにリンクを希望される方もご連絡ください。

編集部 〒338-0811 さいたま市桜区白鷺135-13 坂崎 守寿
Email: mori.reds-041205@jcom.home.ne.jp
事務局 〒300-1636 茨城県利根町羽根野850-59 河野 毅
Email: kohno@msd.biglobe.ne.jp



熊本弁講座 - 「お」編 -

KUMAMOTO

創刊号からシリーズ化した熊本弁講座ですが、大変好評？につき、今回は「お」編です。恥ずかしがらずに、どうぞ声に出して、熊本弁の良さを存分にご堪能ください。

- ①「オモサン」（たくさん、いっぱい、思っきり）
「ひもしかろ？ オモサン、食いなっせ」
（お腹すいたでしょ？ たくさん、食べて下さい）
- ②「オドン」（私、俺）
「オドンが、先に行っとくけんね」
（私が、先に行ってるからね）
- ③「オメク」（大声を出す）
「そぎゃん、オメかんちゃ、よかろもん」
（そんなに、大声を出さなくても、いいでしょうに）
- ④「オトロシカ」（怖い、恐ろしい）
「昨夜、墓のそばは通ったばってん、たいぎゃなオトロシカった」
（昨夜、墓のそばを通ったけれど、とても怖かった）
- ⑤「オッペシャン」（ブス、不細工な人）
「うちん娘は、オッペシャンたい」
（うちの娘は、ブスです）
- ⑥「オロイカ」（出来が悪い、良くない、ボロい）
「こん服は、たいぎゃなオロイカね」
（この服は、とてもボロいね）



<編集後記>

「ゆるキャラグランプリ2011」で第一位を獲得し、すっかり全国区となった「くまモン」ですが、なんと、昨年12月末の米国経済紙「ウォール・ストリート・ジャーナル」に「愛らしいキャラクターたちの競争」と題して紹介されました。（ついに世界進出ですばい！！）

「くまモン」の関連グッズの売り上げも、2.5億円を超えているそうです。東京一極集中型となっている日本ですが、熊本を始め、地方の頑張りに大変うれしく思います。個人的には、道州制が設置された際には、熊本が州都となって、地域活性化、地方経済再生につながればと願っています。「くまモン」に倣って、東京鶴城会でも、ユニークなキャラクターを作りたいと密かに思っています。まず、名前は「かくじょうクン」でどうでしょうか。

『ハーバード白熱教室』に魅せられて - Vol.3

「レポートの締め切りに間に合わない」、「単位が取れそうになく、卒業できない」。今でも夢でハーバード時代のことで魔されます。まさに悪夢です。しかし、現実にはそれ以上に過酷なものでした。これまで医師国家試験での勉強（1日平均12時間以上の受験勉強）や研修医時代（年間平均睡眠時間4時間）など数々の困難を体験してきましたが、今考えると、まさに夢よりはるかに過酷な学生時代でした。

2007年7月から大学院での講義が始まりました。ハーバードは、前期と後期の2期制で、それ以外にWinter seminar、Summer sessionなどがあります。講義は単位制で、卒業するには9ヶ月で42.5単位以上が必要という規定があります。多くの学生は、知り合いの先輩に講義の評価を聞いたり、ネット上で公開されている講義の満足度などを参考に、講義を選択していきます。全ての講義はネット上で予約していくのですが、人気のある講師のレクチャーはすぐに満員となり、講義の申し込みの日には、みんなコンピューターの前に釘づけとなってしまうのです。

多くの日本人学生が戸惑うのは、何と言っても英語でしょう。留学が決まってから大手英語塾に通いましたが、全く太刀打ちできません。言っているのが早くて全く聞き取れないのはもちろん、何となく言っていることが分かったと思った時には、話題が変わっています。いつも神経を集中していなくてはならないので、とても疲れてしまいます。朝は8:50から講義が始まり、午前中90分の講義が2コマ過ぎると、ハトハトになっていました。午後は1コマの講義をとっていることが多く、昼食をとってからは、講義に備えた予習を行い、午後の講義が終われば、すぐに図書館へ直行、という生活が3ヶ月続きました。ほとんどの必修講義は録画されており、学生はいつでも、どこからでもネット上で見ることができます。しかし、復習のために見ようと思っても、そんな時間はありませんでした。この時の睡眠時間は、平均3時間。夕食が終わったらすぐに勉強やレポートを作成し、毎日午前2時、3時まで勉強という日がほとんどでした。何が何でも、毎日勉強、勉強、そして勉強でした。今考えるとゾーッとしますが、やればできるものだという自信は少し獲得することができたのかと思います。

以前NHKで「ハーバード白熱教室」という番組がありました。日本で見ると講義の雰囲気新鮮なのですが、毎日あんな感じて授業が進められます。

教授や講師が話をしている、学生から何か質問があると、すぐに授業はストップ、学生もそれなりに意見を言ってディスカッションが始まります。教授が生徒に問いかけると、生徒は何人も手をあげて意見を述べる。これまで私が体験した授業とは全く異なるものでした。講師陣も質問がないのは逆に自分の話が面白くないと学生が思っている、と考えるくらいで、医学生時代の教授が延々と黒板に、自分がやってきたことを板書する講義とは雲泥の差でした。

世界トップレベルのハーバード。講義では特別なことが話されているかという、そうではありません。いつも基礎的な話ばかり。それも何度も何度も、繰り返し繰り返し、基礎的なことばかり。「それ、以前に何回も聞いたよ」と思うことが多々ありました。以前担当教授になぜ繰り返し、基礎的な話をするのか？と質問したことがありました。教授曰く、「ハーバードは基礎を教えるところ。その基礎を土台にして無限の可能性を模索していくのは学生自らの仕事」という言葉はとても記憶に残っています。まさにその通り。どんな分野でも基礎を学んでおく大切さを、改めて認識させられました。

英語の講義によりやく慣れてきたのは、半年以上経ってからのことです。少しずつ講師の言っている事が分かるようにはなりましたが、どの程度内容を理解できていたかは不明です。現時点での反省点は、とにかく文法なんかにごたわらずに話をすればよかった、ということです。英語で話していて、文法めっちゃくちゃな英語で、良く通じたなあと感じることが多々ありました。日本人の悪いところだと思いますが、これから留学する人にアドバイスするとしたら、「**文法不要、思いついた単語を並べれば話は通じる**」ということでしょうか。このように勉強は大変でしたが、「生きる術・考える術」を学べた体験は、まさに自己投資です。研修医時代の恩師の言葉に「**授人以魚不如授人以漁**」という老子の言葉があります。「魚を与えるのではなく釣り方を教えよ」という意味ですが、全くの同感です。ハーバードは、まさにその方法を教えてくれる場所でした。

（ハーバード留学体験記を<http://ameblo.jp/asakusa-clinic/>で公開しております。興味がある方は、ぜひご覧下さい。）

内山 伸（平5年卒）

*内山さんは現在、浅草7にッて活躍中。

上尾市区長会連合会

副会長 植田 幸一
（昭24年卒）

〒362-8501
埼玉県上尾市本町3-1-1
TEL(048) 775-4539 (直通)
<事務局>尾市企画財政部自治振興課

内閣府認証
パソコン整備士協会
会長 西村 恭輔
（昭25年卒）

〒101-0034
東京都千代田区神田東紺屋町28
那智ビル6階
TEL.03-5297-2558 FAX.03-5297-7027
<http://www.pc-seibishi.org>

田中 幸資
（昭38年卒）

昭40年卒 境屋 由夫
（宇土市本町5丁目出身）

実家は蒲鉾製造販売のお舗です。宇土に御帰郷の切は是非、「境屋かまぼこ店」にお立ち寄りください。
住所：宇土市旭町421-4
TEL：0964-22-0162

車の買い取り・販売のご相談は
日東金属株式会社・車輛部

代表取締役 永井 秀夫
（昭40年卒）

〒158-0083 世田谷区奥沢7-11-5
TEL.03-3704-0161 Fax 03-3704-0170

ウイルス対策・除菌・抗菌・消臭
『マタタコロ』
株式会社エースネット

児童英語の草分け
アプリコット出版株式会社
萩原 秀文
（昭42年卒）

PAPER AND PRINTING
グローイン

代表 森内 忠美
（昭50年卒）

〒101-0051
東京都千代田区神田神保町1-62 2F
TEL & FAX 03(3259) 1116
E-mail: growintn@aol.com

東京宇城市会
宇城市出身の方、是非、ご参加下さい。

塚原 直美（昭52年卒）
〒154-0002
東京都世田谷区下馬3-32-8-205
E-mail: yavo-reene@s9.dion.ne.jp